

北宋末南宋初期における曹洞宗祖師の実証的研究(二)

—大洪山第四代目丹霞德淳、第七代目淨嚴守遂について—

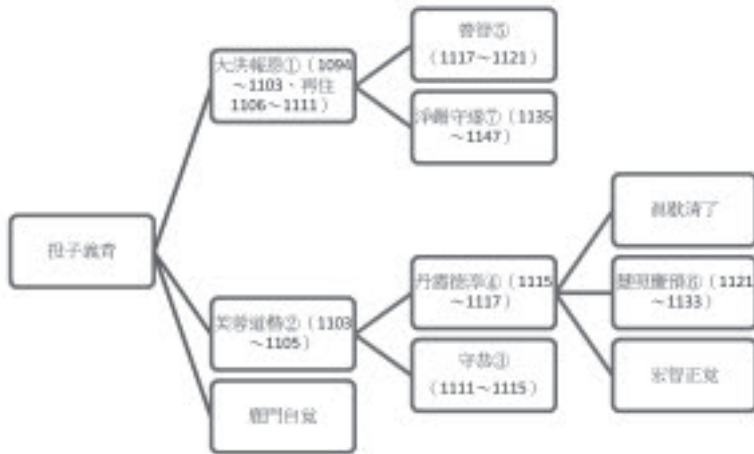
胡 建 明

一 はじめに

本稿は、昨年度、駒澤大学仏教経済研究所の『仏教経済研究』第四十三号に掲載した『北宋末南宋初期における曹洞宗祖師の実証的研究(一)——大洪報恩、芙蓉道楷について——』の続稿である。

既に述べたように、本研究は、駒澤大学の石井修道名誉教授の『宋代禪宗史の研究』(昭和六二(一九八七)年十月、大東出版社)という卓越した研究成果を継承しながらも、かつて石井氏が直接参考とされなかった新出資料、とりわけ大洪山東塔院古址にある現存原碑資料に基づき、筆者が現地踏査をし、その精査・解説に基づいて、新たに考察を加えた内容の一部である。

守恭は大洪山第三代目住持であるが、彼の事跡についての資料は皆無である。「随州大洪恩禪師塔銘」によれば、政和三(一一一三)年癸巳四月七日に初代大洪報恩の碑を建てたのは守恭であったが、碑文の末行に「法姪崇寧保壽禪院住持伝法沙門守恭立石」が記されている故に、芙蓉道楷の法嗣ではないかと考えられる。また「恩禪師塔銘」によると、報恩は芙蓉道楷が崇寧三(一一〇四)年に大洪山を退董した後、その二年後の崇寧五(一一〇六)年に



図A 大洪山歴代住持

(*括弧内は、大洪山の初代から七代の住持期間)

再住を果たして、政和元(一一一一)年七月十四日に示寂するまで約五年間大洪山の住持を務めていた。同じく芙蓉道楷(一〇四三〜一一一八)の法嗣である丹霞徳淳(一一〇六〜一一一七)が第四代目になったのは政和五(一一一五)年九月二十五日であるため、守恭の住持期間は、長くても政和元年の七月から五年の九月頃までの五年間であろう。彼については、生卒と事跡が不詳のため、その間の大洪山の様子は知る由もない。ただ徳淳の「塔銘」によれば、徳淳が住持を請われた際には、すでに「院は回祿を経ての後、巍峩の雲構は、化して荒墟と為る」という激しい大火災に見舞われた後の惨状にあった。しかし徳淳の尽瘁によって、灰燼に化した伽藍が再興され、僧五百まで増えるという盛況を呈したという。そして、その苦勞を重ねたためであろうか、徳淳は住持して一年半足らずの政和七年三月十一日に、五四歳の若さで弟子の宏智らに見取られ、師の道楷よりも一年先に示寂したのである。

彼の後の五代目は、徳淳の塔を建てた善智であるが、

彼は開山報恩禪師の法嗣であり、恐らく政和七（一一一七）年から宣和三（一一二一）年まで大洪山の住持として務めていたが、彼の詳細もよく知られていない。徳淳の法嗣の慶預は宣和三年から南宋紹興三（一一三三）年の秋まで、約一三年間第六代目として大洪山で住持を務めた。第七代目は、恩禪師の法嗣浄嚴守遂（一〇七二～一四七）である。守遂は紹興五（一一三五）年から紹興十七（一一四七）年まで、師の報恩と同じく一三年間に亘って、大洪山で祖塔を守った。大洪山の七代目までの世代を整理すると、前頁の表【図A】のようになる。本稿は、その中の丹霞徳淳と浄嚴守遂を取り上げて論じてみたい。

二 丹霞徳淳と浄嚴守遂の動静

北宋哲宗朝から南宋高宗朝までの北宋末南宋初期の曹洞宗の動静に就いては、前号でも述べたように、北宋末では、投子義青門下の報恩と道楷の活躍によって、その勢力が大洪山を中心として大きく伸張した。その後の大洪山は、時代の波にさらされて、興廢相替えながらも、報恩と道楷の法嗣、法孫たちの努力で長い間に祖塔を守り続けた。特に芙蓉道楷の弟子徳淳（子淳とも）と報恩の弟子守遂が僧俗での徳望高く、大きな復興を遂げた。しかし、甚だ惜しいことに、徳淳が五十四歳の若さで亡くなり、曹洞宗の命運と重担はやがて彼の弟子たちが荷うことになる。いわゆる芙蓉の三賢孫である慧照慶預、宏智正覚、眞歇清了の時代に移って行く。本稿は北宋末と南宋初期の時代背景にも考察しながら、徳淳と守遂の行跡をひとつひとつ検討し、その辺りの動静を探ってみたい。

さて『続燈録』卷二十六と『普燈録』卷七等の資料によると、芙蓉道楷の法嗣は、延べ二十四人も数えられる。すなわち、①西京龍門南、②西京招提宝、③西京天寧禧誦（一〇五七～一一一五）④鄧州丹霞徳淳（大洪四世）、⑤東京浄因枯木法成（一一〇七～一一二八）、⑥襄陽府石門元易（一一〇五～一一三七）、⑦成都大智齊璉（一一〇七～

（一一四五）、⑧漳州府梅山修己、⑨*東京淨因自覺（?）（一一一七）、⑩福州普賢善秀、（⑪*襄陽府鹿門法燈（二〇七五）（一二二七）、⑫隆興府泐潭闍提惟照（一〇八四）（一二二八）、⑬建昌軍資聖南、⑭襄陽府洞山道微、⑮隨州大洪守恭（大洪三世）、⑯西京少林江、⑰潼州府景山居、⑱*靈巖應、⑲合州鑑、⑳*齊州善應、㉑西京尼道深、㉒太傅高世則居士、㉓朝請崔公居士、㉔提刑楊傑居士という。前号にも載せた『宋大洪楷禪師塔銘』では、「當時升堂入室者、散之四方、皆續佛慧命、為人天師。今住世者、如焦山成、大隋璉、鹿門燈、石門易、寶峯照、即其人也」と、また、「度弟子九十三人、法嗣得骨髓出世者二十九人。皆緣法盛行于世、而丹霞淳公、其後尤大」と記している。法嗣の数は多少合わないが、然しその中の焦山成は即ち⑤東京淨因枯木法成のこと、大隋璉は⑦成都大智齊璉のこと、石門易は、⑥襄陽府石門元易のこと、鹿門燈は⑪襄陽府鹿門法燈のこと、寶峯照は⑫隆興府泐潭闍提惟照のことと思われる。

この塔は芙蓉の法孫慶預が立石した故に、その師徳淳に対して大いに讃辞を与え、特別な扱いをするのは当然のことであろう。前号にも指摘したように、筆者は⑨東京淨因自覺は、あるいは投子義青の法嗣ではないかと論じたが、それが後世になって芙蓉の法嗣と変わってしまったのかもしれない。もしくは⑪襄陽府鹿門法燈と混淆したのではないか。淨因自覺が襄陽府鹿門寺で住持したかどうかは疑問が残る。しかし、筆者が一昨年鹿門寺を訪ねて確認したことからは、歴代住持僧のなかには、明らかに「鹿門法燈」の名が無く、「鹿門自覺」とすり替えられているのが事実である。もしくは「淨因自覺」と「鹿門自覺」とは、ほぼ同時代に生きた別人物ではなからうか。¹つまり芙蓉道楷の法嗣は仮令「鹿門寺の自覺」であったとしても、かつて徽宗皇帝が欽定した「淨因寺の自覺」のことではなかったか。また、法孫慶預が建てた『宋大洪楷禪師塔銘』には、「鹿門法燈」の名があったが、「鹿門自覺」も、「淨因自覺」の名もいずれも出なかったのは如何なる理由であろうか、などの疑問は残る。

ともあれ、自覚を祖とした北地で伝播した曹洞宗は、弟子の西京天寧希辯（或は青州辯、一〇八一〜一二四九）から大明宝、玉山體、雪巖滿、萬松行瑋（行秀とも、『從容録』の著者、一一六六〜一二四六）へ継承され、そして萬松の法嗣雪庭福裕（一二〇三〜一二七五）が高山少林寺で活躍し、弟子の靈隱文泰の時期をさかいに南漸し始め、後に還源福遇、香巖文才、松庭子巖、凝然了改、俱空契斌、無方可從、月舟文載、小山宗書（一五〇〇〜一五六八）、大千常潤（?〜一五八五）、蘊空常忠（一一五四〜一五八八）を経て、壽昌慧經（一五四八〜一六一八）に至って、曹洞宗壽昌派として再建され、遂に南の福州鼓山湧泉寺の永覚元賢（一五七八〜一六五七）、為霖道霈（一六一五〜一七〇二）という明代曹洞宗の代表格とする名僧があらわれ、大いに曹洞宗風を煽いた。その壽昌慧經の下には、二〇の衍字を伝承していた。つまり「慧元道大興、法界一鼎新。通天兼徹地、耀古復騰今」とい、明季に來日した東臯心越（心越興儔、一六三九〜一六九六）も壽昌派開祖慧經の四代目法孫であった。また、燈史等に記した⑱靈巖應と⑳齊州善應とは同一人物と考えられる。靈巖寺は齊州（今濟南市）郊外の古刹で、三年程前に、一度踏査したことがあるが、立派な僧院と歴代塔所（塔林とも）を擁している。ともあれ、芙蓉道楷の衆多の弟子の中で、特筆すべき人物は、いうまでも無く、丹霞山及び大洪山で大きな貢献をし、更に慧照慶預（一〇七八〜一一四〇）、宏智正覚（一〇九一〜一一五七）、真歇清了（二〇八八〜一二五二）という不世出の傑僧を育成した徳淳である。先ず、その塔銘【図4】を見てみよう。（本号で取り上げる二つの塔の写真については前号掲載分を参照されたい。）

※傍線部は、原碑との対照による元来の資料に対する筆者による訂正部分である。また、資料文中で示したのは全て原碑文での改行を意味する。資料転記の要領については以下同様である。

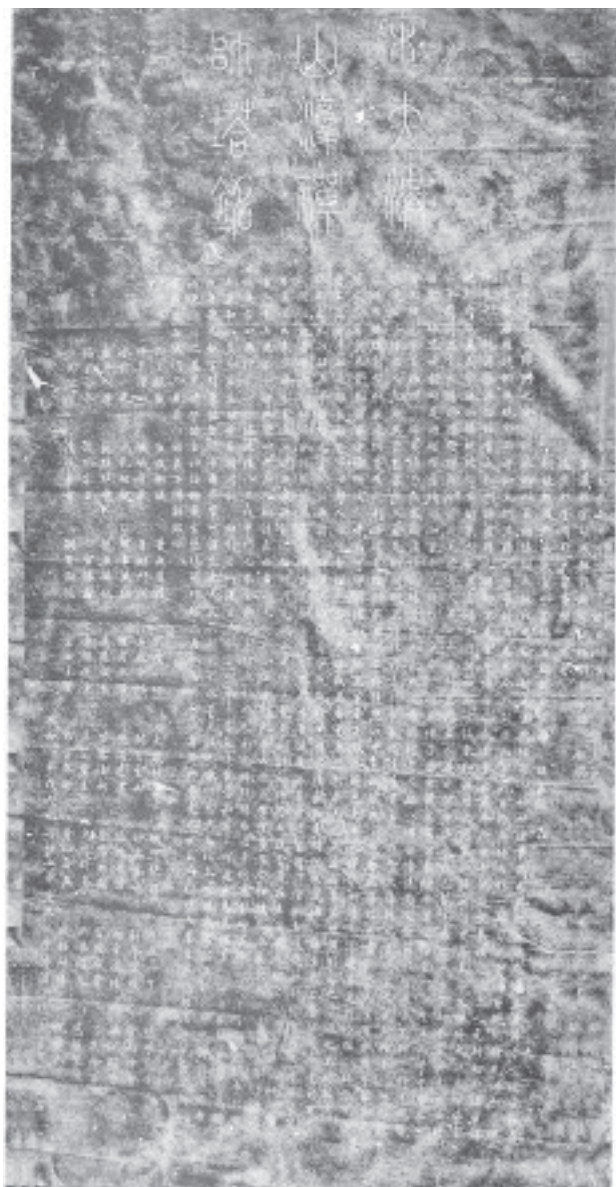


图 4

【圖4】宋大洪山淳禪師塔銘

故隨州大洪山十方崇寧保壽禪院第四代住持淳禪師塔銘

承議郎管勾成都府國寧觀賜緋魚袋韓 韶撰

通議郎亳州司戶曹事韓 皓書

朝散郎提點西京高山崇福宮賜緋魚袋韓 昭篆額

甚矣哉！道之難明也。分宗列（圖）派，所以互揚隱顯而彼我之論紛起，迴塗轉位所以妙叶。理事而同異之說，熾然趣真者，滯于空迹，涉俗者、洎（圖）于緣塵。履踐相庇，絕念而游，抑又何其難也。有導師出焉，虛而不凝，照而常寂。言行無玷，內外一如。自利利他，曾微間斷，先洪山淳禪師是也。師諱德（子）淳，俗姓賈氏，劍州梓潼隕人。自幼不喜草辛，依隕之大安寺出家，年二十七祝髮，受具，禮道凝上人為師。初即講席，探、究教典，頗通義學。既而幡然，改曰：名相累人，如泥塗溺足，乃拂袖游方。徧參知識，歷大瀉真如詰禪師、寶峯真淨文禪師、大洪恩禪師室、皆承獎待。後至大陽，訪道楷禪師，今浙川芙蓉老人是也。一見師器之，老人垂示，但云：退步就己，萬不失一。又云：空劫承當，佛未出世時、體會。師忽妙契，由是迴超根塵，頓忘知見。老人後住大洪，命師立僧、學識威儀，為衆標表。崢嶸道望，推重一方。崇寧三年甲申，王公、信玉、按荆京右，雅聞師名德，乃徇衆願請住南陽丹霞山天然道場。將行，老人歷仏祖佉法偈及諸家宗旨因緣勘辨。師心機響、答，煥若水釋。老人尤歎異。丹霞叢席久廢，先時圓明大師住持宗門，軌範稍復旧貫，至師乃大振起之。雲水高人風聞輻湊（圖）。師於是、益闢田疇、繕室宇，以広延納事為之。制條端有倫，一衆蕭然。安禪靜慮，山中素闕藏（欠字）典，師啓意導化，曲盡經營，迄至有成，靡不蒙益。南、陽之人，每歲來會，奉持齋律，悟明性宗者，莫可殫計。環山十餘里，草辛不敢入。雖邑吏田夫，猶能漸漬陶染，遷善遠罪，以順師教，況服、膺至道者乎。如是句歲初終不少懈，人根浸熟，祖令益振。乃辭疾退居于唐州大乘山之西庵。有泉若醴，得於庵之前，汲之不竭。殆為、師而出也。政和五年，隨州太守向公再請師住洪山保壽禪院。院經回祿之後，巍峩雲構，化為荒墟。師至，悉力營繕增壯于前。逾年之間，復就者十七八。衲子依投，衆幾五百。方緣盛道，七年丁酉春，示有微疾，三月十日，忽謂侍僧云：勿復進藥，時將至矣，安可久留。翌、日書偈云，來亦無言，去亦無說。無後無前，一輪明月。是夜五更，僧正竟至問訊。師乃云：我當自在去矣。良久端坐而逝，世壽五十四、僧、臘二十七。度弟子悟興等四十三人，嗣法出世者二人，利昇今住唐州大乘山普嚴禪院，慶預今住隨州水南太平興國禪院。有語錄、偈、頌、頌古四卷行世。師沒後八日戊申，門人奉全身建窆塔於山之南，恩禪師塔右。緇素悉慕，雲物哀慘。師平生道行孤潔，兒古、而氣和，心真而言厲。韶昔自穎川訪師於丹山，每言吾今生以來，未嘗敢造業，當知業不可造，為患甚深。蓋師自韶龢立志超邁、擺、脫塵勞、及趣空門。勇猛堅定、

卓爾不群、可謂眞丈夫矣。其操行也深、其見法也微。以忘機為化本、以離識為宗通。故能妙唱偏圓、伝持曹、洞、使沂川之道、光焰烜赫。至於接物度生、慈悲懇切、殆忘身以徇之、而住壽若此、弗克永世。茲所以望失群生、而悲摧法梁也。韶夙荷獎、提慙微報稱、門人見属以銘。義不得辭、銘曰：

正法眼藏 孰敢擬議 普応群機 不受一切 大哉師宗 曠然絶謂 了無所了 味兮忘味 師生潼川 岷峨秀氣 善財門開 遍參方外 别有雲山 妙高聳峙

針芥投機 空劫神會 氷霜一色 水乳相契 理事兼融 體用無滯 愍諸迷津

悲願洪誓 両坐道場 無説顯示 虚舟以游 應縁絶意 龍象攝伏 遠邇咸至

甘露法雨 普霑庶類 言發成章 乃其餘事 拈出古今 頌明宗旨 白雪陽春

遠繼投子 茫茫群生 巨川將濟 洪浪滔天 慈航忽逝 惟其不沒 清規垂世

嗣有顯德 宗風未墜 白雲卷舒 青山秀異 我銘師塔 忱辭無愧 立石

政和八年戊戌九月初一日庚辰住持傳法沙門 善智 立石

【書き下し文】

甚だしき矣哉、道の明らめ難きや。宗を分かち派を列す、所以に互いに隠頭を揚げて、而して彼我の論は紛起す。塗を廻り位を転ず、所以に妙に理事に叶いて、而して同異の説は熾然なり。真に趣く者は空迹に滞り、俗に渉る者は縁塵にいたる。履踐相い応じ、念を絶ちて遊び、抑も又何ぞ其れ難からん。導師有りて焉に出で、虚にして凝らず、照にして常に寂し、言行玷無く、内外一如にして、自利利他し、曾て間斷微きは、先の洪山淳禪師、是れなり。

師の諱は德淳、俗姓は賈氏。劍州梓潼県の人なり。幼きより童辛を喜ばず、県の大安寺に依りて出家す。年二十七にして、祝髮受具し、道凝上人を礼して師と為す。初め講席に即き、教典を探究して、頗る義学に通ず。既にして幡然と改めて曰く、「名相は人を累わす、泥を満足に塗るが如し」と。乃ち拂袖して游方し、知識を徧參す。大馮眞如詰禪師・寶峯眞淨文禪師・大洪恩禪師の室を歴て、皆な奨待を承く。後に大陽に至り、道楷禪師を訪う、今の沂川の芙蓉老人、是れなり。師を一見して之を器とす。老人は垂示して但だ云う、「退歩して己に就けば、万に一を失わず」と。又た云う、「空劫に承当して、仏の未だ出世せざる時に体会せよ」と。師は忽ち妙契す。是れ由り廻かに根塵を超え、頓に知見を忘れる。老人は後に大洪に住し、師に命じて立僧せしむ。学識威儀は衆の標表と為り、崢嶸たる道望は、一方に推重せらる。崇寧三（一一〇四）年甲申、王公信玉按刑京右、雅に師の名徳を聞き、乃ち衆の願を徇いて、請うて南陽の丹霞山天然の道場に住せしむ。將に行かんとするに、老人

は歷つぎに仏祖の伝法偈、及び諸家の宗旨因縁を以て勘弁す。師の応機響答は、煥らかなること水の積るが若し。老人は尤も歎異す。丹霞の叢席は久しく廢る。先時、円明大師、住持し、宗門の軌範、稍や旧貫に復し、師に至りて乃ち大いに之を振起す。雲水高人は風聞して輻湊す。師は是れ於いて益ます田疇を闢き、室宇を繕い、之を以て広く納事を延く爲なり。条端を制して倫あり、一衆は蕭然として、安禪靜慮す。山中は素より蔵典を闕け、師は意を啓き導化し、曲に経管に尽くし、成有るに至る迄、益を蒙らざるはなし。南陽の人、毎歳、來会し、斎律を奉持し、悟明性宗を悟り明かす者は、計を彈すべからず。山を環る十餘里は、葷辛は敢えて入らず。邑吏田夫と雖も、猶お能く漸に陶染を瀆り、善に遷り、罪を遠ざけて、以て師の教に順う。況や至道を服膺する者をや。是の如く旬歳にして初終も少しも懈けず。人根は浸に熟し、祖令は益ます振う。乃ち疾を以て辞し、唐州大乘山の西庵に退居す。泉有りて醴の若し、庵の前に得て、之を汲めども竭きず、殆ど師の爲にして出ざるなり。政和五（一一一五）年、随州太守向公再び師を請して洪山保寿禪院に住せしむ。院は回祿を経ての後、魏衰の雲構は、化して荒墟と爲る。師は至りて力を悉して宮繕し、壯を前に増す。年を逾すの間、復た就く者十の七八。衲子依投して、衆は幾ど五百にして、方めて縁盛んにして道広まる。七年（一一一七）丁酉の春、微疾あるを示す。三月十日、忽ち侍僧に謂いて云く、「復びは藥を進むること勿れ、時は將に至らんとす、安んぞ久しく留まるべけんや」。翌日、偈を書して云く、「來るも亦た言無く、去るも亦た説無し。後も無く前も無し、一輪の明月」。是の夜の五更、僧正覺、至りて問訊す。師は乃ち云く、「我れ当に自在に去るべし」。良久して端坐して逝く。世寿五十四、僧臘二十七。度せる弟子は、悟興等四十三人、嗣法出世する者は、二人。利昇は、今、唐州大乘山普嚴禪院に住す。慶預は、今、随州水南太平興國禪院に住す。「語録」、「偈頌」、「頌占」四卷有り、世に行なわる。師の没後八日の戊申に、門人は全身を奉じて窆塔波を山の南の恩禪師の塔の右に建つ。緇素は恋慕し、雲物は哀慘す。師は平生、道行孤潔なり。貌古にして气和らぎ、心眞にして言厲し。韶、昔し潁川より師を丹山に訪う。毎に言う、「吾れ今生より以來、未だ嘗て敢えて業を造らず、当に知るべし、業は造るべからず、患いの甚だ深きが爲なり」。蓋し師は齟齬より志を立ててに超邁にして、塵勞を擺脫し、空門を趣くに及んでは、勇猛に堅定して、卓爾として群ならず、謂つべし、眞の丈夫なり、と。其の行を操るや深く、其の法を見るや徹せり。機を忘るるを以て化本と爲し、識を離るるを以て宗通と爲す。故に能く偏円を妙唱し、曹洞を伝持して、沂川の道をして、光焰烜赫ならしむ。接物度生に至りては、慈悲懇切なり。殆ど身を忘れて以て之に徇ず、而して住寿は此の若くして、克く永世せず。茲の所以に望失の群生は、法梁を摧くを悲しむ。韶、夙に契を荷い懇を提げて、報称微し。門人に属せらるるに銘を以てし、義として辞すことを得ず。銘に曰く、

正法眼蔵は、孰ぞ敢えて擬議せん。普く群機に応じて、一切に受けず。

大なる哉、師の宗、曠然として謂を絶す。了するに了する所無く、味わいて味を忘る。師は潼川に生まれ、岷峨のごとく秀氣なり。善財の門開き、方外に遍參す。別に雲山有り、妙高のごとく聳峙す。針芥投機して、空劫に神会す。氷霜一色にして、水乳相契う。理事兼融して、体用滞ること無し。諸の迷津を愍み、悲願をもて洪きく誓う。兩び道場に坐し、無説をもて顯示す。虚舟以て遊び、縁に應じて意を絶す。龍象は攝伏し、遠邇のものは威な至る。甘露の法雨は、普く庶類を霑す。言発して章を為すは、乃ち其の余事なり。古今を拈出して、頌して宗旨を明かし、白雪陽春をもて、遠く投子を継ぐ。茫茫たる群生は、巨川、將に濟らんとするに、洪浪、天に滔ち、慈航は忽ち逝けり。其の没せざるを惟うに、清規、世に垂れ、嗣ぐに顕徳有りて、宗風は未だ墜ちず。白雲は卷舒し、青山は秀異す。我れ師の塔に銘す、忱辭は愧無し。

政和八（一一一八）年戊戌九月初一日庚辰、住持傳法沙門善智、立石す

上記の塔銘の劈頭に記されたように、撰者承議郎韓韶は、かつて大洪開山報恩禪師の塔銘の書写と、芙蓉道楷の臨沂塔の旧銘を撰した官人でもあるが、彼の事跡に就いて、石井修道博士は「不詳」としてある。しかし筆者は、恐らく宰相韓續（一〇一九～一〇九九）の親族、或いはその子孫の一人ではないかと推測する。大洪山との結縁がよほど深い人物である。また、篆額を書いた韓昭（大同居士、河北真定の人）も、同じく報恩禪師の塔銘の碑額に篆書を題した官僚であり、韓續の曾孫の一人である。碑文を書いた韓皓に就いても、よくわからないが、韓續一族の子孫の一人であると考えてよからう。徳淳の報恩、道楷の元々の縁者達との深い繋がり的一端を物語っている。

徳淳の塔銘から見れば、彼は西蜀劍州梓潼県の賈氏であり、県の大安寺で出家し、二十七歳で受具し、最初は講席に通って經典を学んだが、その後、禪に転向して、蜀を出て、江湖を遊歴した。当時の一代の名僧、大滙真如詰禪師・宝峯真淨文禪師・大洪恩禪師などの門を叩いたが、機縁はかなわなかった。後に大陽山の道楷に參学し、大悟を得たという。道楷が何時大陽山に住持したかは、よくわからない。しかし慧照慶預が十四歳で大陽山の道楷の下で出家したという記述³から推せば、遅くても元祐六（一〇九一）年より前に、洛陽の白馬寺（招提寺）から郢州

京山県の大陽山に移っている。そもそも慶預は京山県の胡氏であり、道楷を慕って上山し、道楷の膝元に約十年間いたと伝わっている。そうすると、徳淳の参学の順から考えれば、凡そ元符元年或いは二年（一〇九八ないし九九九）頃であろう。徳淳と慶預との相見もその時である。徳淳は三十五、六歳、慶預は二十一、二歳、道楷は五十六、七歳の時に当たる。道楷は、崇寧二（一一〇三）年に大洪山報恩の後席を続いて、二世として大洪山に赴いた。翌甲申（一一〇四）年、徳淳が王信玉に招かれ、師に辞を伝え、大洪を後にして南陽の丹霞山棲霞寺に入り、出世した。丹霞山は唐代に石頭希遷（七〇〇～七九一）下の天然（七三九～八二四）が開いた道場であり、徳淳は留錫して約十年、久しく廃れた丹霞山を大いに復興し、規矩を整え、芙蓉の宗風は盛んに賑わった。その後、病気の為、法嗣の利昇が住持する唐州の大乗山普嚴禪院の西庵に退居した。時は、徽宗皇帝の政和四（一一一四）年、徳淳五十一歳である。翌年の九月二十五日に徳淳は大乗山で随州太守向公より大洪山崇寧保寿禪院第四代住持の任命を受けた。原因は不明であるが、その前に大洪山は大きな火災を蒙り、壮麗な伽藍は、灰燼に帰した。徳淳は一年間をかけて、その廢墟の上で力を尽くし、再び前よりも勝れた寺院を再建し、門下は五百人ほど集まるといふ盛況を呈した。度重ねた苦勞の末、徳淳は政和七（一一一七）年の春に病で倒れ、薬石も効かず、三月十日、薬を拒み、十二日の凌晨四時頃、弟子宏智正覚らに見取られて、五十四歳で示寂した。住持した時間は、僅に一年半である。師の芙蓉道楷より一年先に世を去った。

『塔銘』によると、『嗣法弟子として二人、即ち唐州大乗山普嚴禪院に住持する利昇と随州水南太平興国禪院の慶預とが記されているが、実際には高足真歇清了、宏智正覚をはじめ、得法の者が多くいた。撰者の韓韶は、ただ當時既に出世した二人を記したのみである。後に宋代曹洞宗默照禪の代表的大禪者の一人である宏智正覚が、その時大洪山で師の徳淳の側近として侍奉した記述は頗る注目に値するであろう。徳淳は、芙蓉門下に於いて、最も傑出

した禅者であり、彼は北宋末期の曹洞宗の振興にとつて、甚だ重要な立役者の一人である。特に慶預、清了、正覚、所謂芙蓉の三賢孫といわれる名僧を育て上げたことが、中国禅宗史に於いて重要な意義を有する。徳淳の宗風は、彼が残した『語録』、『偈頌』、『頌古』に表われ、彼は大洪報恩、芙蓉道楷らに一貫する戒律復興、坐禅重視の宗旨を堅持したと思われる。その『頌古』の中に「自宗」という偈頌があり、よくその妙旨を唱えている。

空劫の自己、依守無し、(空劫自己無依守)

仏祖従来、口を啓き難し。(佛祖従来難啓口)

九年の面壁、太だ多端、(九年面壁太無端)

那ぞ更に強いて妍醜を分かつに堪えん。(那堪更强分妍醜)

とある。更に宏智正覚が撰した『丹霞山淳禅师頌古序』が、よく師の徳淳の風範を表わしている。⁵⁾

韓韶は徳淳の門人に頼まれて塔銘を撰したと記しているが、慶預からの囑託であろうか。引き続き、下記の徳淳の同門兄弟、大洪山七世の浄嚴守遂の塔銘【図5】について、考察してみよう。

【図5】 大洪山遂禅师塔銘

随州大洪山崇寧保寿禅院第七代守遂禅师浄嚴和尚塔銘

敷文閣直学士奉直大夫潼州府路兵馬都鈐轄瀘南沿邊安撫使知瀘州提舉学士兼管内勸農使文安縣開国伯食邑七百邑賜紫金魚袋

馮穢撰

右朝請大夫知復州軍州事主管字事兼管内勸農官田事賜金魚袋 呉説書並題額

師諱守遂、遂寧府蓬溪章氏子也。家世業儒、奉佛尤篤。母初懷妊、頗有吉祥。既生、在襁褓間、見僧即喜、幼不茹葷酒、不隨

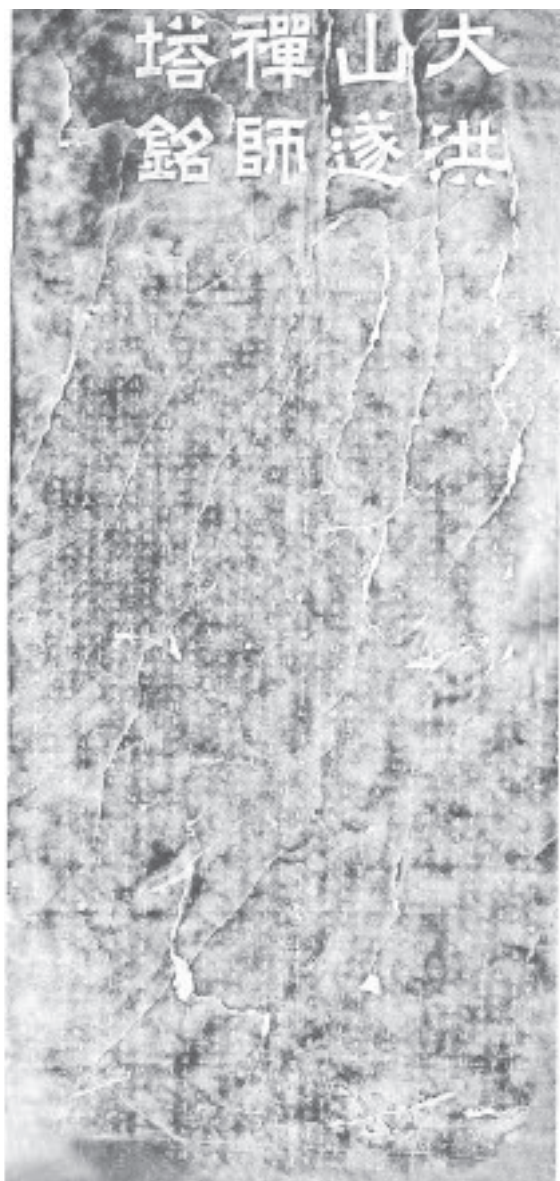


图5

童戲。年十三，父母顧之曰：此兒終非塵中人。迺携詣（註）本邑南巖院，（託）僧自慶為師。年二十七得度，纓受具，即辭師往依講席，復徧歷吾蜀諸禪，究明己事。因緣未契，束包南遊，初抵玉泉，見愍禪師。愍器之，命副院事。歲餘，罄囊中所積歸常住，惟杖履。參訪襄漢一時，尊宿。次依棲大洪開山恩禪師，（便）看俱胝豎指因緣，一日於僧堂作（欠字），方展坐具，忽（見）小蟲飛墮于地，遽拂之隨手，豁然大悟，開山肯之。於是服勤教軌，乃命總院事。政和辛卯，恩順寂，師畢後事。乃往（遊）江浙諸山，值智禪師住持，偃仍舊職。政和戊戌，郡東雙泉禪院虛席，隨守袁公灼命師出世，衲子奔湊，傳道不暇。袁公欽師道德，奏賜淨嚴師號。俄改住水南禪院，（德）（唐）望益著，遐邇（聞）風而至。靖康丁未，退止德安嶺山，會延福禪院方丈闕人，安守李公公濟命師繼踵。未幾，兵戈蜂起，凶寇將至，郡官命師領眾入城，因建化城庵居之，訓徒如故。賊圍城久，米升四十金。時眾尚廣，日唯一粥，師獨請半。士大夫分惠糧儲之類，即均贍。大眾晨夕提振祖令（命），愈勤不輟。賊勢甚緊，高聲喝（唱）言，城破，但存延福長老。攻既不利，而曰城中果有異士，遂引去。鎮撫陳公規聞，而謂眾曰：異士迺吾淨嚴也。紹興乙卯，師退居東堂未數月，宣撫使司命居大洪。時以襄漢纒復，百里絕人，荆襄塞路，虎狼交跡。山頂僧行散逃，餓死，所存不滿（過）百數。日漁野菜，橡糜，以度朝昏。供利阻絕，屋宇墮頽，莊夫耕具，十無一二。師方定居，勸勉緇徒，開通供路，招置人牛，墾闢田圃。未期歲間，四方禪衲，駢肩而來。檀越社供，如赴約束。逾年，僧及半千，次滿七百。復修院宇，追述先（範），大闡綱宗。自此靈濟道場，廢而復興。師住持十有三年，叢林再盛，不減疇昔。紹興丁卯春，師示疾，誠侍者曰：每聞鐘魚，方進粥飯，過午則不復啜耳。示化前一日，囑門弟子曰：吾今將往，信（任）自緣，汝等壯年，當此佛法陵替，各宜勉力辦道，勿違佛戒。至三月四日，問侍者曰：今日是幾者，曰：初四。師令備浴水，齋罷，沐浴更衣，歸方丈，熟寢至黃昏，遽起。時知事小師，環繞侍立，師顧視（左）右，斂容端坐。少頃，暴風驟作，丈室搖振，土崩瓦墜，眾謂屋摧，四散驚出。唯副院宗舒疑師長住（往），侍立不動。良久，端然示脫。傍有聞龍神殿內鳴指噓聲，方丈後石崖忽摧，山之四圍（圍）人，望峰頂（紅）光燦爛。

皆疑遺火。詰旦登山，始知師逝。於是連宵風雪陡作，峰巒變白。四眾號慟，禽獸哀鳴。留三日，入龕。後七日，窆全身於院之陽同光塔之右。葬日清明，風和日暖。示化之夕，郡官夢師訪（于）公宇，茶話之久，辭曰：老僧去矣。次日，接師遺書，駭歎異之。師平昔精持毗尼，絲（絜）毫無玷，不服繖纒，布衣紙衾。不執財寶，不肯衆食。檀越所得施利，並歸常住。士大夫患以玩好，隨得隨施。平生（生）與（物）無忤。至於蚤蝨，不忍棄之。師世壽七十六，僧臘四十九，四坐道場三十載。提振祖令，度門弟子宗叢等百餘人。嗣法已出世者數人。師垂手接人，雖慈悲示誨而不順世情，入室普說，寒暑無（倦）。禪徒不時參扣，並無阻卻。因僧問，如何是佛。師曰：休瞌睡。叢林以為龜鑑。得師之道者，無慮百數。師即恩禪師嫡嗣，曹溪十四世孫也。禪冥接人之外，

一毫之善弗遺、結十萬人、念阿弥陀佛。刊華嚴大教〔遺經〕、諸經集、傳注解四十二章、遺教經、鴻山警策。有語錄、偈頌並行於世。紹興庚申夏、師有違和、有景陵檀越吳興施財、預建塔亭、以備後事。師病起、折充院前歇亭。知事衆謂恐違檀越意、乃懇止之。師因示識文、其略曰、予欲以吳君所造塔亭下、止以飄灰壘、一同歸塔。欲自予已往、當山住持者、同葬遺骸於其中。所貴省緣、免致唐勞。從事無益、為可勤傳正眼、令慧命不絕、即斯道綿遠無窮。幸同道者、察予鄙志。師既歸寂、後人以重欽奉、輕於違師之志、同歸之義、衆議寢焉。其小師宗善、狀師行實。自洪山不遠數千里而來求銘於予、予與師為同鄉、且以道契。每欽其道行、為里閭之光、義不當辭。嗚呼、歲不寒、無以知松柏之後彫、火不烈、無以驗真金之不變、事不難、無以見高人節守。今世之所謂高僧者、莫大乎闡揚教典、傳授祖燈、護戒精嚴、存心慈忍、禪定不乱、精勤匪懈、身不衣帛、囊無積財、力興叢林、善荷徒衆、長齋不麻〔味〕、坐脫立亡、有一於此、號曰名德。儻卒然臨之禍患憂危之變、鮮有其心不搖奪者、而師於〔于〕衆美〔善〕則兼而有之。自〔而〕又能以高尚者之所難能者〔與〕。若逢時厄運、群盜四起、德安大府環繞幾徧、師乃入城、創庵居之、與衆同患、米貴如珠、不忍散衆、闔城〔都〕驚惶、師無懼色。提振祖令、宛如〔若〕平時。聲傳賊耳、自唱言、城破、但存淨嚴一人。師雖聞此、唯〔惟〕以利害為心、誓與闔城俱存亡。既以道德保護一方、賊遂攻擊不利、而洪城中果有異士、從而引去。賊既解而師退。在他人則追念前日虎口之危、亦且少休。或求安靜之地以自養、是為得計。而洪山全仰遠供、以贍多衆。時則賊去未久、供路不通、山頂屋宇、大半頽圯、僧徒餓殍、十喪八九。所存餘衆、惟以野菜、橡糜僅充口腹、聞者莫不遠避。而宣撫司命師往往住持、而師亦毅然從之。既至、躬率其徒、開通供路、葺治田圃、魚鼓之聲復聞。未幾、社供復來、衲子奔湊。於是重修院宇、百廢俱〔具〕興。卒安七百餘衆。靈濟道場、燦然復新、有加於昔焉。嗚呼〔乎〕、師於傳道修行之外、又為人所難能、有如此者、求僧中之名德、罕見其比。非夫夙植德本者、而道力深厚曠克然耶〔邪〕。銘曰、大洪之巔、靈濟開山、始自恩公、更律為禪、嗣法淨嚴、繼踵而住、十有三年。道行化普、師生于遂〔遂寧〕、幼願出塵、受具之後、周游問津、徧登講筵、復歷禪苑、既通教乘、欲窮法派、因緣未契、束包南遊、竟遇洪山、針芥相投、俱抵一指、洞徹源底、佛祖機緣、更無餘旨、宗說俱通、解行相應、能博能約、有規有繩、精持毗尼、常恐弗及、食不背衆、衣不衣帛、不棄蚤蝨、不蓄資財、人所愛惡、已獨忘懷、高士所為、獨兼衆美、臨患難而不變、世莫得而倫擬、若居德安、會賊四圍、闔城震恐、日懼顛危、師行祖令、宛類平時、賊謂有異人而引去、庸非賴道德之慈威、逮兵禍之稍平、亦可休而少息、洪山供利、久已隔絕、凌晨無粥、而正昼無食、餓殍而死者過半、幸免而存者十一、師被宣司之請、不復辭難而往、芟荆榛以登陟、關虎狼而趨上、野菜橡糜、與衆同餉、率其徒以開路、招檀施而贍養、曾未逾年、衲子奔湊、田圃丘墟、俄復耕耨。

寺宇傾摧 鼎新卑陋 卒安七百高僧 名藍廢而復舊 此舉世之難能 師優為之而不以為難 致緇素之阪(圖)重 宜幽明之
 共尊 圓寂之夕 暴風遽作 龍神鳴指而長嘯 山崖裂石而崩落 時當暮春 大雪降格 禽獸哀號 林巒變白 紅光現於峯頂
 化体初無改色 巍巍聳塔瑞雲中 高示遺規為永則

左朝奉大夫權發遣隨州軍州主管學事兼管內勸農官田事借紫金魚袋 田孝孫 立石、紹興二十六年上元日受戒弟子賀善崇・張
 善堅等共施財 命福唐鄭彥輝・陳元仲刊

【書き下し文】

師の諱は守遂、遂寧府蓬溪の章氏の子なり。家は世々に儒を業とし、佛に奉ずること尤も篤し。母初めて懷妊するに、頗る
 吉祥有り。既に生まれて襁褓の間に在りて、僧を見て即ち喜ぶ。幼に葷酒を茹わす、童戯に随わず。年十三にして、父母は之
 を顧みて曰く、「此の児は終に塵中の人に非ず」と。迺ち本邑南巖院に携詣し、僧自慶に礼して師と為さしむ。年二十七にし
 て得度し、纔かに受具して、即ち師を辭して、往きて講席に依り、復た吾が蜀の諸禪を徧歴し、己事を究明するも、因縁は未
 だ契わず。包を束ねて南遊し、初め玉泉に抵り、愍禪師に見ゆ。愍は之を器として、副院の事を命ず。歲餘に罄囊中に積える
 所を常住に帰し、惟だ杖履のみをもて、襄漢の一時の尊宿を参訪す。次いで大洪開山恩禪師に依棲して、嘗て俱胝豎指の因縁
 を看せしむ。一日、僧堂に於て作礼し、方に坐具を展べんとして、忽ち一つの小蟲の飛んで地に墮ち、遽に之を拂い、隨手に
 豁然として大悟す。開山は之を肯す。是に於いて服勤するところ教載して、乃ち命じて院事を總べしむ。政和辛卯(一一一一)、
 恩は順寂す。師は後事を畢えて、乃ち江浙の諸山に往く。智禪師の住持に値いて、仍ち旧職を徧る。政和戊戌(一一一八)、
 郡東の雙泉禪院虚席す、隨守袁公灼は師に命じて出世せしむ。衲子は奔湊し、道を伝うるに暇あらず。袁公は師の道徳を欽い、
 奏して淨嚴の師號を賜わらしむ。俄に改めて水南禪院に住せしむ。徳望益ます著われ、遐邇の緇徒は、風を聞きて至る。靖康
 丁未(一一二七)、退して徳安の巖山に止まる。会たま延福禪院の方丈、人を闕く。安守李公公濟は、師に命じて踵を継がし
 む。未だ幾くもならざるに、兵戈蜂起し、凶寇將の至らんとす。郡官は師に命じて衆を領して城に入らしむ。因りて化城庵を
 建て之に居せしめ、徒を訓くこと故の如し。賊は城を圍むこと久し、米、四十金に升る。時に衆尚お広く、日に唯だ一粥のみ
 にして、師は独り半を請う。士大夫は、糧儲の類を分け恵み、即ち均しく贍く。大衆は晨夕に、祖令を提振し、愈いよ勤めて
 輟めず。賊勢甚だ緊ちて、高聲に喝言す、「城、破れり、但だ延福長老存するのみ」と。攻むるに既に利あらず、而して曰う、
 「城中に果たして異士あらん」と。遂に引き去る。鎮撫陳公規は、聞きて衆に謂いて曰く、「異士とは、迺ち吾が淨嚴なり」と。
 紹興乙卯(一一三五)、師は東堂に退居す。未だ数月せざるに、宣撫使司は、命じて大洪に居せしむ。時に襄漢纔かに復し、

百里、人を絶ち、荆秦の路を塞ぎ、虎狼の跡を交えるを以て、山頂の僧行は散逃す。餓死、の存する所は、百数を満たす。日々野菜、橡糜を喰い、以て朝昏を度る。供利を阻絶し、屋宇は墮頽す。莊夫の耕具は、十に二も無し。師、方めて定居して、緇徒を勸勉し、供路を開通し、人牛を招置し、田圃を墾闢す。未だ期歳ならざる間に、四方の禪衲は、肩を駢べて来り、檀越お社供は、約束に赴くが如し。年を逾えて、僧は半千に及び、次いで七百に滿つ。院宇を復修し、先範を追述し、大いに綱宗を闡く。此れより靈濟の道場は、廢れて復た興る。師、住持する十有三年にして、叢林は再び盛んにして、曠昔を減ぜず。紹興丁卯（一一四七）の春、師は疾を示し、侍者を誡めて曰く、「毎に鐘魚を聞いて、方めて粥飯を進めよ、午を過ぎては則ち復びは啜わざるのみ」と。示化する前の一日、門弟に囑して曰く、「吾れ今、將に往かんとし、自縁に信任す。汝等は壯年なり、此の仏法の陵替に當ありて、各おの宜しく勉力辦道すべし、佛戒に違ふこと勿れ」と。三月四日に至りて、侍者の問うて曰く、「今日は是れ幾者か」。曰く、「初四なり」。師は浴水を備えしめ、齋罷に沐浴更衣して、方丈に歸りて熟寢す。黃昏に至りて、遽に起きる時、知事、小師は、環遶して待立す、師は左右を顧視して、容を斂めて端坐す。少頃にして暴風、驟に作り、丈室搖振し、土崩れ、瓦墜つ。衆は屋の摧くと謂いて、四散して驚き出づ。唯だ副院の宗舒のみは、師の長住と疑い、侍立して動かす。良久端然として示蛻す。傍に龍神殿の内に指を鳴らし嘘聲するを聞くもの有り、方丈の後の石崖は、忽ち摧く。山の四囲の人は、峰頂の紅光燦爛たるを望み、皆な遣火と疑う。詰旦に山に登り、はじめて師の逝くを知れり。是に於て宵を連ねて風雪、陡に作り、峰巒、白に変わる。四衆は號慟し、禽獸は哀鳴す。三日留めて、龕に入る。後七日にして、全身を院の陽の同光塔の右に瘞る。葬日晴明にして、風和日暖なり。示化の夕、郡官は、師の公宇を訪ね、茶話の久しくして辞して、「老僧は去けり」と曰うを夢む。次の日、師の遺書に接して、駭歎して之を異とす。師は平昔、毗尼を精持して、絲毫も玷無し。緇纈を服せず、布衣・紙衾をもつてす。財宝に執せず、衆食に背かず。檀越より得る所の施利は、並な常住に帰す。士大夫の惠む玩好を以てするも、得るに随い施すに随う。平生、物と忤らう無く、蚤・蝨に至るまで、之を棄つるに忍ばず。師、世寿七十六、僧臘四十九。四たび道場に坐すること三十載にして、祖令を提振す。度せる門弟子は宗齋等、百餘人。嗣法して已に出世する者は、數人。師の垂手接人は、慈悲示誨すと雖も、世情に順わず。入室普説は、寒暑、倦むこと無し。禪徒の不時の參扣も、並な阻卻無し。因みに僧問う、「如何なるか是れ仏」。師曰く、「瞋睡することを休めよ」。叢林は以て龜鑑と為す。師の道を得る者は、無慮百數十なり。師は即ち恩禪師の嫡嗣にして、曹溪の十四世の孫なり。禪宴の接人の外、一毫の善も遺すこと弗く、十万人を結びて、阿弥陀仏を念ぜしむ。華嚴大教、諸經集を刊し、『注解四十二章』、『瀉山警策』を伝え、『語録』、『偈頌』有りて、並な世に行なわる。紹興庚申（一一四〇）の夏、師、違和有りて、景陵の檀越の呉興なるもの有り、

財を施して預め塔亭を建て、以て後事に備う。師、病起え、折めて院前の歇亭に充つ。知事・衆は謂えらく、恐らく檀越の意に違わんと、乃ち懇ろに之を止まむ。師、因て「誠文」を示す。其の略に曰く、「予、呉君の造る所の塔亭の下を以て、止だ願灰の壘を以て一同に塔に帰めん」と欲す。自予より已往の當山住持者をして、同じく遺骸を其の中に葬らんと欲す。貴う所は縁を省き、唐勞を免致す。事を従すは益無し。勤めて正眼を伝うべきが為に、慧命を絶たざらしめば、即ち斯の道は綿遠として無窮ならん。幸くは同道の者よ、予が鄙志を察せよ。師、既に帰寂し、後人、以て欽奉を重んじ、師の志に違うを軽んず。同帰の義は、衆議、焉に寝む。其の小師の宗善なるもの、師の行実を状わし、洪山より数千里を遠しとせずして來り、銘を予に求む。予の師におけるや、同郷為りて、且つ道を以て契う。毎に其の道行を欽い、里閭の光と為す。義として辞するに当たらず。嗚呼、歳、寒からざれば、以て松柏の後彫を知ること無く、火、烈からざれば、以て真金の不変を驗すこと無く、事、難からざれば、以て高人の節守を見ること無し。今世の所謂の高僧とは、教典を闡揚し、祖燈を伝授し、戒を護ること精嚴にして、心を慈忍に存し、禪定乱れず、精勤懈る匪く、身に帛を衣ず、囊に財を積ること無く、力めて叢林を興し、善く徒衆を荷い、長齋にして寐ず、坐脱立亡するより大なるは莫し。一も此に有れば、號して名徳と曰う。儻し卒然と之を禍患憂危の變に臨ましめば、其の心の搖奪せざる者有ること鮮し。而るに師は衆美に於て則ち兼て之を有り。自から又た能く高尚の者の能くし難き所を為す。若しくは時の厄運に逢い、群盜の四起して、徳安の大府は、環遶すること幾く徧なるも、師は乃ち城に入り、庵を創めて之を居し、衆と與に患を同じくす。米の貴きこと珠の如くなるも、散衆に忍びず。闔城は驚惶するも、師は懼る色無し。祖令を提振すること、宛も平時の如し。聲は賊の耳に伝わる、自ら唱言す、「城、破れり、但だ淨嚴一人存するのみ」と。師は此れを聞くと雖も、唯だ衆を利するを以て心と為し、誓つて闔城と存亡を俱にす。既に道徳を以て、一方を保護し、賊は遂に攻撃利あらず、而して曰く、「城中に果たして異土有らん」と。従いて引き去る。賊、既に解けて、師も退ける。他人に在りては、則ち前日の虎口の危を追念し、亦た且つ少らく休し、或は安靜の地を求めて、自養を以て是れ得計と為す。而るに洪山は全く遠供を仰いで、以て多衆を瞻く。時に則ち賊去りて未だ久しからざれば、供路は通ぜず、山頂の屋宇は、大半は頽圯し、僧徒は餓殍し、十に八九を喪う。存する所の餘衆は、惟だ野菜・橡糜のみを以て、僅かに口腹に充つ。聞く者は遠避せざるは莫し。而して宣撫司は、師に命じて往きて住持せしむ。而るに師も亦た毅然として之に従う。既に至りて躬ら其の徒を率い、供路を開通し、田圃を葺治す。魚鼓の聲、復び聞える。未だ幾くもならざるに、社供は復た來り、衲子は奔湊す。是れ於て院宇を重修し、百廢俱に興す。卒に七百餘衆を安じ、靈濟の道場は、燦然として復新し、昔より加うる有り。嗚呼、師は伝道修行に於ての外、又た人の能くし難き所を為すこと、此の如き者有り、僧中の名徳を求むるに、其の比を見ること罕なり。

夫れ夙に徳本を植えて者あらざれば、而して道力深厚なるに、瞬か克く然らんや。銘に曰く、

大洪の巔は、靈濟の開山なり。恩公より始めて、律を更えて禪と爲る。嗣法せる淨嚴は、踵を継いで住すること、十有三年、道行ない化普し。師は遂に於て生まれ、幼より出塵を願う。受具の後、周游して問津す。徧く講筵に登り、復た禪苑を歴たり。既に教乘に通じ、法派を窮めんと欲す。因縁未だ契わず、包を束ねて南遊す。竟に洪山に遇い、針芥相い投ず。俱胝の一指、源底を洞徹す。仏祖の機縁は、更に餘旨無し。宗・説俱に通じ、解・行相応す。能く博く能く約し、規有り、繩あり。毗尼を精持し、常に及ばざることを恐る。食は衆に背かず、衣は帛を衣せず。蚤・蝨を棄てず、資財を蓄えず。人の愛惡する所、已に独り忘懷す。高士の爲す所は、独り衆美を兼ね。患難に臨んで変らず、世に得て倫擬する莫し。徳安に居るが若きは、賊の四圍に会い、闔城に震恐し、日々顛危を懼るも、師は祖令を行じて、宛も平時に類たり。賊は異人有りと謂いて引き去る、庸に道徳の慈威に頼るにはあらざらんや。兵禍の稍や平らぐに違ふで、亦た休むべくも少息するのみ。洪山の供利は、久しく已に隔絶す。凌晨に粥無く、而して正昼に食無し。餓殍して死する者は半を過ぎ、幸いに免れて存する者は十に一なり。師は宣司の請を被りて、復びは難を辞らずして往く。荊榛を葑りて以て登陟し、虎狼を闢きて趨上す。野菜と橡糜とを、衆と與に同じく餉い、其の徒率いて以て路を開き、檀施を招而いて贍養す。曾て未だ年を逾えざるに、衲子は奔湊す。田圃と丘墟とは、俄に復た耕耨す。寺宇は傾き摧けるも、卑陋を鼎新す。卒に七百の高僧を安んじ、名藍は廢れて復旧す。此れ舉世の能くし難きなれば、師は優に之を爲して以て難と爲さず。緇素の飯重を致す、幽明の共尊を宜くす。円寂の夕、暴風、遽に作り、龍神は指を鳴らして長嘘し、山崖は石を裂きて崩落す。時、暮春に当たりにて、大雪降格し、禽獸は哀号し、林巒は白に変わる。紅光は峯頂に現れ、化体は初め色を改む無し。巍巍として聳塔を瑞雲の中に聳えさせ、高く遺規を示して永則と爲す

左朝奉大夫権発遣随州軍州主管学事兼管内勸農官田事借紫金魚袋 田孝孫 立石す。

紹興二十六(一一五六)年上元の日、受戒の弟子の賀善崇・張善堅等は、共に施財を施し、福唐の鄭彦輝・陳元仲に命じて刊せしむ。

周知のように、北宋王朝は国内の武人勢力を抑えるため、終始、文治政治を採った。軍事力と防衛力が弱体化された故、常に北方異民族の侵攻を受けていた。前期は契丹(遼)と西夏の外患に悩み、妥協して銀錢と絹帛(歳幣)

を送り、ギリギリまで何とか和平を保った。然し、後期の第八代皇帝徽宗朝になると、内政も混乱におち、そして外交も、遼と西夏に代わって、十二世紀前半、新興した金の脅威にますますさらされたことになる。金は北方を平定した後、大軍を南下させて、その矛先を宋の都汴梁（開封）に向けた。北宋軍は無力で、敗退を余儀なくされ、徽宗は慌てて長男の欽宗に譲位した。欽宗の靖康元（一一二六）年十一月に、一か月以上の激しい攻防戦の末、遂に金の大軍が宋の都汴梁を陥落させた。徽宗・欽宗以下の皇族や官僚など数千人が捕虜となり、北地に連行された。二帝も満州の五国城で長い虜囚生活を送り、望郷の念を抱きながらも、最後は相次いで病気を罹って客死した。そして多くの官僚も抑留され、皇族とその眷属など数千人の女性たちも悉く性的な暴行を受けたという大事件になった。北宋が華北の地を占領された最後の年号が靖康元年であったため、「靖康の変」或いは「靖康の恥」と呼ばれるが、中国歴史の舞台において、最も悲痛な一幕である。そして欽宗の弟の康王趙構が江南に逃れて、杭州を臨時の都として即位し（高宗）、年号は建炎とした。これ以後を南宋という。こうした歴史背景の下では、攻防の要塞である漢水の畔に位置する湖北随州にある大洪山も、勿論その戦乱を免れることができなかつたのである。

上記の『大洪山遂禪師塔銘』での「靖康丁未、退止德安嶺山……。未幾、兵戈蜂起、凶寇將至、郡官命師領衆入城、因建化城庵居之、訓徒如故。賊圍城久、米升四十金。時衆尚広、日唯一粥、師獨請半……。賊勢甚緊、高聲喝言、城破、但存延福長老。攻既不利、而曰城中果有異士、遂引去。……紹興乙卯、師退居東堂未数月、宣撫使司命居大洪。時以襄漢纒復、百里絶人、荆秦塞路、虎狼交跡。山頂僧行散逃、餓死、所存不滿百數……。」などの内容には、その惨状の一部始終が記されている。因みに靖康丁未は靖康二（一一二七）年にあたり、金の大軍は破竹の勢いで黄河を渡って、襄漢地方（襄陽、武漢の当たり）の随州、黄州、黄梅などを攻略し、更に長江を下って德安（今江西省九江市の県の一つ）城下まで攻めて来た。南宋紹興五（一一三五）年になって、ようやく襄漢を回復したが、大洪山

は第六代目住持慶預の時、嘗て二千人を擁した大伽藍⁶が、その時には百人にも満たない荒涼たる光景であった。守遂が大洪山で七世の住持命を負ったのは、法姪の慶預が立ち去った二年後の紹興五（一一三五）年である。その惨憺たる状況は、彼の『塔銘』に鮮烈に映っている。しかし、守遂は十三年の間、万難を克服し、大洪山の復興を尽瘁し、廢墟と化した伽藍を再興し、田園を開墾し、規矩を整え、遂に雲衲を七百に増やした。

そもそも、宗遂の『塔銘』を撰じたのが、同じく四川省出身の官僚馮熾である。守遂は遂寧府蓬溪の人であり、馮熾の生まれ故郷広漢県と程遠くない場所である。守遂の門弟宗善が師の行状を持って、千里以外の潼川府に赴き、馮熾に塔銘を求めたことについては、やはり師の同郷の官人であることに注目すべきであろう。宋代の禅林では、四川省出身の大禅者が多くを占め、また彼らは多く同郷の官僚たちと非常に親近し、その教化を護持し、助縁した。例えばや先輩の圓悟克勤（一〇六三—一一三五）（成都彭州崇寧の人）と宰相張商英（成都新津の人）との交流もその一例である。また、兄弟弟子の徳淳も、宝峯惟照（簡州陽安の人）、石門元易（潼川銅山の人）、鹿門法燈（成都華陽の人）も、そして法姪の真歇清了も綿州安昌の出身であるから、四川省出身の宋代臨濟僧が多いことばかりではない。曹洞宗、とりわけ大洪山報恩、芙蓉の門下の蜀僧達の活躍も今後の研究に於いて、注目すべきであろう。守遂の『塔銘』では、神僧守遂という一面が非常に強調されている。例えば、九江の徳安城の不落のこと、そして臨終の間際での天変地異や、龍神の出現や、暮春の降雪、郡官に夢の告知などの描写は、撰者馮熾の作意的なものであると思われる。『高僧伝』にある一種常套的な表現であろう。

ともあれ、守遂という禅僧は、北宋末から南宋初期という多事多難の時代に生き抜いた、大洪山を中心として、曹洞宗の発展に際して華やかな活躍と甚大なる貢献を為した特筆すべき人物であると思う。

守遂の弟子は、『塔銘』では数人と言及してあるが、最も重要な一人は後に大洪山第十一代目住持となった慶顯

(一一〇三〜一一八〇)である。慶顯も四川省広安県の出身で、天童宏智正覚の指示で大洪山の守遂に師事し、嗣法した人物である。

三 おわりに

以上、芙蓉道楷の法嗣、大洪山四世丹霞德淳、大洪報恩の法嗣、大洪七世淨嚴守遂の塔銘を通して、北宋末(哲宗朝、徽宗朝)南宋初期(高宗朝)の期間をめぐって、大洪山で活躍した德淳、守遂を中心として、曹洞宗の動靜を考察して来た。

本論を纏めると、左記のように二つのポイントが挙げられる。

① 北宋末から南宋初期における四川省出身の禪僧の活躍が非常に際立つことである。これは、臨済僧ばかりではなく、曹洞僧でも多くの蜀僧が存在している。本論の德淳も、守遂も勿論、また、彼らの同門と後輩の中でも数多くの蜀出身の禪者達が大きな力を發揮した。更に、彼らは同郷の官人達と強い絆で結ばれ、宋一代の禪林で、リーダー的な役割を果たした。今後、これに注目して、新たな研究を期したい。

② 北宋末から南宋初期の禪宗、とりわけ曹洞宗の動靜の把握では、社会的、歴史的な背景を考慮すべきである。特に北宋滅亡から南渡した宋朝に至るまでの社会的変革や、政治的な事情などの視野を入れなければならないと思う。具体的な史料の実証的考察から、更に進んで思想的な深い探索は必須である。

本論は、あくまでそれらの概略を記述したものに止まり、周到な論は、なお今後の研究に譲らなければならぬ。

注

(1) 石井修道博士の『宋代禪宗史の研究』二八〇頁～二九四頁の第三章の第四節「鹿門自覺派の変遷——北伝曹洞宗——」を参照。

(2) 寿昌派は、今でも中国で細々と伝承されている。ただ寿昌慧経から数えて、第二十代目の了然今浄禪師の一派、近現代の鼓山下からは、再び新たな二十の衍字が始まった。これは「今日禪宗振、宏開洞上傳。正中妙抉旨、虚融照獨圓」という。因みに筆者の衍字は「禪」に当たる。

(3) 『大洪山預禪師塔銘』では、「師、胡姓也。世居郢之京山、生十有四年、依楷祖出家于大陽。又十年、遂依楷落髮、子受具戒。久之、楷器其所證、遣佐丹霞德淳禪師」云々とある。

(4) 『普燈錄』巻九等の記載からは、德淳の法嗣が真州長蘆真歇清了、慶元府天童宏智正覚、随州大洪慧照慶預、唐州大乘利昇、処州治平潤、鄂州大陽滿、廬山歸宗明、武当仏巖、随州修山等の名を見ることができらる。

(5) 『丹霞山淳禪師頌古序』參学比丘僧正覚述。嶺南之後、派列岐分。曹洞一宗、門庭孤峻。月鈞雲餌、不犯清波意自殊。玉線金針、宛軫虚玄鋒不露。正偏兼到、妙尽忘功。明晦叶通、力窮軫位。綿々乎克当其胄者、奚有丹霞淳禪師歟。師一日退居無住庵、慨宗風之欲墜、乃採摭從上機縁。首自清源、下之保寿。総一百則、集而為頌。俾乎至道、垂裕後昆。其明宗也、潜通於未兆之前。其立旨也、密契於無功之後。煙籠古路、乘玉馬以踐苔紋、月鎮蒼溟、駕泥牛而耕練色。全体即用、豈滯虚凝。全事即眞、不彰影迹。琉璃殿上、臣退位以朝君。翡翠簾前、子軫身而就父。借功明位、撒手廻途。幽岩枯木騰芳、古澗寒氷發燄。密雲致雨、濟萬物以無心。杲日麗天、落百川而非照。無絃曲調、不属宮商。自有知音、通相證據。謹序。(台湾国立中央図書館所蔵、元版『四家録』)

(6) 慶預が靖康二(丁未)年四月二十五日に新たに建てた道楷の『塔銘』には、「今慶預在大洪、禪子至二千、清了在長蘆、正覚在普照、亦至千衆。蓋天下三大刹、曹洞之宗、至是大振矣」と記されている。時期的にこれは金の随州に侵攻する直前の記録と為る。慶預が宣和三(一一二二)年に大洪山の住持となり、大いに大洪山の興隆に貢献した。また、靖康の戦乱を忍びながら、紹興三(一一三三)年の秋まで大洪山の祖塔を堅守した後、十三年に亘った住持職を辞し、大洪山を去り、廬阜を経て、法弟の清了が住持している福州の雪峯山に入った。慶預がやむなく大洪を手放し、南下した理由は、恐らく戦乱後、政局の不安定や、大洪山の難局も收拾がつかない状況に置かれていたために違いないであろう。

(7) 慶預の塔銘『明悟大師塔銘』では、「師乃詣天童、見宏智覺禪師、一見心服。然当機不発。閱三年、辞去。宏智指示云、子見吾叔淨嚴遂、当為子重。師奉教徑趨大洪」と記されている。